

群 教 七	G07 - 02
	平14.205集

これをもって 教室へ行こう！



■主 題 「技能の習得と家族の思いを関連付け、
家族とのかかわりを深める指導の工夫」

—— 10のモジュールと

セルフエスティームからのアプローチ ——

■長期研修員 村岡 清美（基礎・基本）

■研究の概要 6年の後半で、家庭生活の工夫の学習を行った。常に家庭生活との結びつきを
考えながら技能を学び、技能を生かすことで家族とのかかわりを深めようとした。
そのために、基礎的な技能の復習と個の課題解決を助ける応用的な技能を身に付
ける学習モジュールを取り入れた。また、家族とのかかわりを意識させ、家族へ
の思いを高めるためにセルフエスティームを取り入れ、家族の思いに着目させた。

■キーワード 【家庭科教育 小学校 基礎・基本 モジュール 家族関係】

I 家族の役に立ちたいという願いに応 えるために

実態は・・・

県内 13 小学校に行った「家庭生活に関する
アンケート」から次のようなことが分かった。

〈子どもたちの願い〉

- ・家族のために役立ちたい
- ・技能を身に付けたい
- ・経験不足から思うようにできない
- ・自信がなくなり意欲がそがれる

〈教師の思いや悩み〉 図1

- ・価値が多様化し、個に応じた指導が必要
- ・プライバシーへの配慮が必要
- ・家庭生活や家族の学習は評価が難しい
- ・家庭生活や家族の学習は指導が難しい

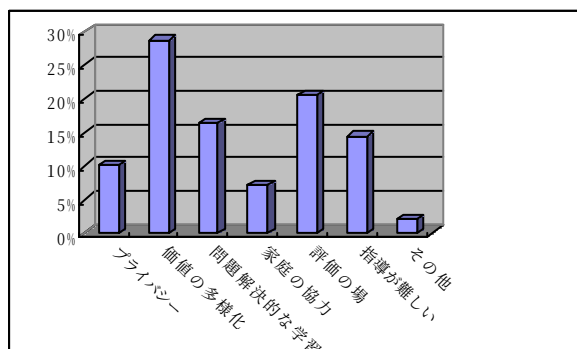


図1 教師の家庭生活の指導についての思いや悩み

技能の習得と家族の思いを関連付ける

アンケートの結果や今回の改訂での家庭の在
り方を見ても、家族の人間関係の内容の一層の
重視の中で衣食住の内容と家庭生活を関連させ
家族とのかかわりを深めることが必要である。

そこで、家族とのかかわりを深めるためには、
家族を見つめさせ、子ども一人一人の家庭での
状況に応じた方法で課題を解決していくことが
大切であると考えた。課題解決には知識や技能
の習得が必要である。それを習得したり、既習
のものから再構成したりするために、技能を中
心とした学習教材のモジュールを取り入れ、自
己の課題に沿って選択させることを考えた。そ
して技能を家族のために生かすという目的意識
をもって学ぶために、子どもたちの家族への思
いを高めるセルフエスティームを取り入れた。

このように、技能の習得と家族とのかかわり
を関連付け、子どもたちに自ら進んで家族に貢
献しようとする意欲と技能を身に付けさせ、そ
れを生かし、よりよい家庭生活を営む力を培い
たいと考えた。

ねらい

学習モジュールとセルフエスティームを
取り入れ、技能の習得と家族の思いを関連
付け、家族のかかわりを深める。

II 家族とのかかわりを深める手立て

問題解決的な学習を取り入れた「家庭生活や家族」の題材で、子どもたちが家族の一員とし

ての自覚をもって、家族にかかわれるように各学習過程でセルフエスティームと学習モジュールを取り入れて図2のように構想した。

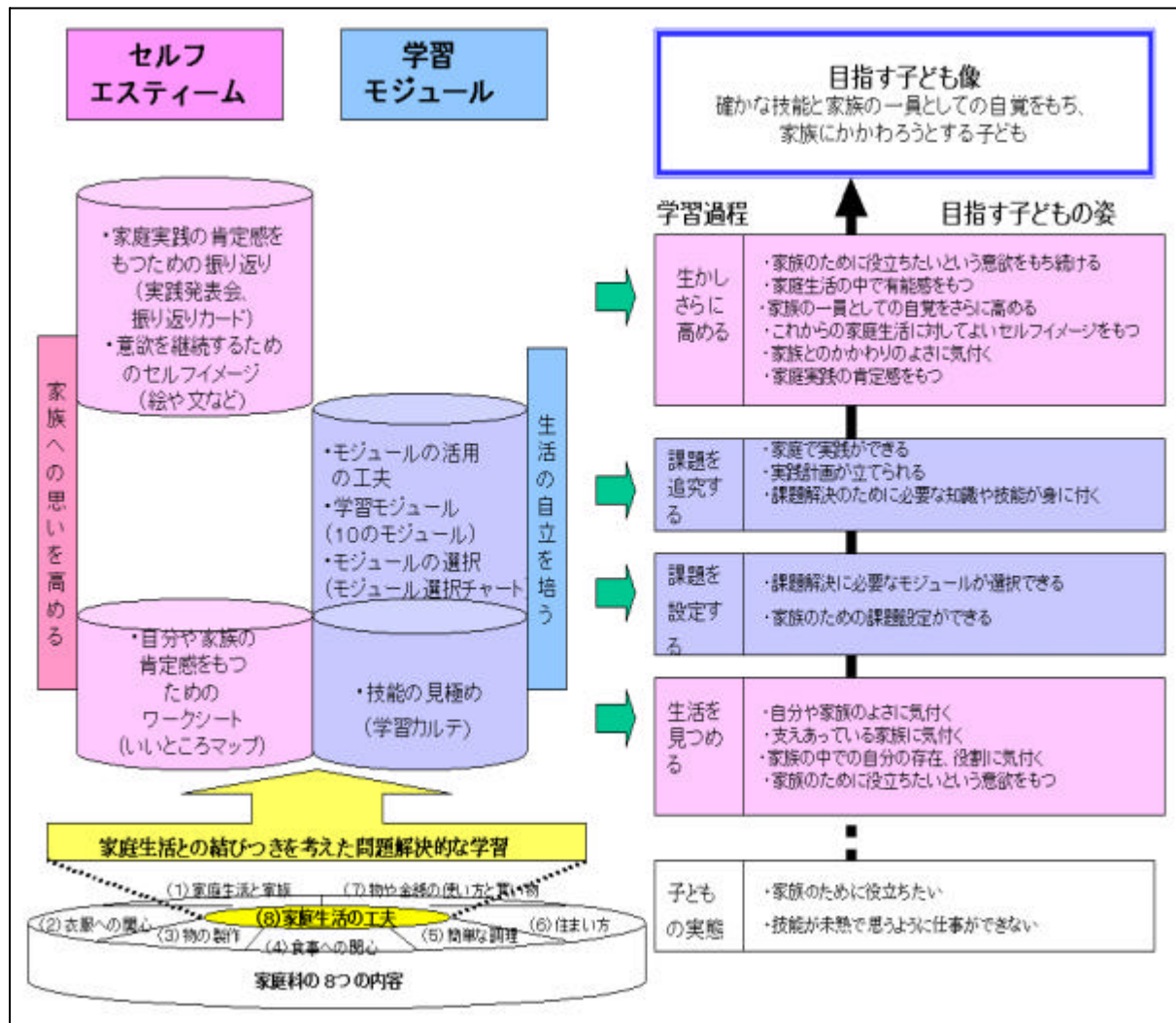


図2 研究構想図

III 家族とのかかわりを深める指導を目指して

1 情意面と技能面からの2つのアプローチ（セルフエスティームとモジュール）

(1) 情意面の高揚～セルフエスティーム～

セルフエスティームとは

セルフエスティーム（self-esteem）は自尊感情、健全な自尊心などと訳される。自分の行動を積極的に評価し、自分が価値ある人間であること（＝自己尊重）、自分自身を好ましい人間であると思ひ、肯定的な感情をもつこと（＝自

己有能感）を意味している。

セルフエスティームは、自分を肯定的に受け止めることで、学ぶ意欲や家族・人間関係を円滑にする力の基となる。また、これは、誰もがもっている自分や家族に対するプラスの意識である。しかし、今までは、それを表出する学習はなかった。次頁図3のように、本研究では、子どもたちの家族に何か役立つことをしたいという意欲の上に、自己と家族へのプラス意識に気付かせ、意欲付けをすることが技能を学習するための目的意識につながると考えた。

- ・技能を総合的に復習させたり、関連を図らせたりして、学習を把握し、イメージしやすい
- ・教師誰もが同じように技能の習得を図らせることができる
- ・子どもたちの課題に応じた技能習得の個別指導ができる

基礎から応用への10のモジュール

表2は、10のモジュールとそこで培う力を一覧にしたものである。それらの関係を図4に示した。モジュールはAとBの2段階とし20の教材がある。モジュールAは生活の自立の基礎を培うためのものである。モジュールBは応用的な力を培い、家庭生活の課題をよりよく解決できるようにするためのものである。BはAよりも自由な材料や道具を使って自己課題に迫れるようにしている。基礎・基本のAから応用的なBの学習モジュールをすることにより、技能を習得しながらも、各家庭の課題解決のための創意工夫の手がかりにさせる。

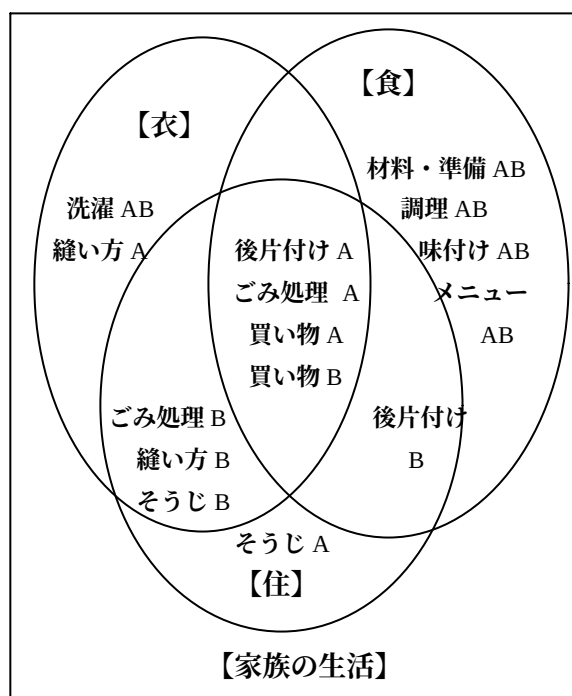


図4 10のモジュールの関係

表2 10のモジュールで培う力（Mはモジュールを表す） モジュールの内容については資料編参照

モジュール	培	う	力	指導内容
1 洗たくM	A	日常着の手入れの仕方（洗濯）	(2)	*指導内容は 学習指導要領の (1)家庭生活と家族 (2)衣服への関心 (3)生活に役立つ物の 製作 (4)食事への関心 (5)簡単な調理 (6)住まい方への関心 (7)物や金銭の使い方 と買い物 (8)家庭生活の工夫 を表す
	B	気持ちよく着るための手入れ（品質表示・アイロン）	(2)	
2 縫い方M	A	製作に関係する知識や技能の習得（手縫い、ミシン縫い）	(3)(2)	
	B	布を使って製作するものに合った適切な縫い方の確認	(3)(1)	
3 材料・準備M	A	品物を選ぶ判断基準	(7)(5)	
	B	食材の選び方や保存の仕方	(4)(5)	
4 後片付けM	A	環境を配慮した後片付け方	(5)(8)	
	B	実践的な食器洗いの仕方	(5)(8)	
5 調理法M	A	食品や調理方法に適した切り方とその習熟	(5)	
	B	いろいろな調理の仕方（電子レンジ調理）	(5)	
6 味付けM	A	正しい計量の仕方と味の付け方の工夫	(5)	
	B	効率的な計量の仕方	(5)	
7 メニューM	A	食品の組み合わせと1食分の食事	(4)(1)	*指導内容は 学習指導要領の (1)家庭生活と家族 (2)衣服への関心 (3)生活に役立つ物の 製作 (4)食事への関心 (5)簡単な調理 (6)住まい方への関心 (7)物や金銭の使い方 と買い物 (8)家庭生活の工夫 を表す
	B	健康に配慮した食生活（糖分、塩分濃度）	(4)(1)	
8 そうじM	A	汚れに合った効果的な掃除の仕方	(6)	
	B	整理整とんの工夫	(6)	
9 ごみ処理M	A	地域の実態に合わせたごみの分別	(6)(8)	
	B	環境に配慮したごみ処理の仕方（不用品の活用）	(7)(8)	
10 買い物M	A	廃棄までを考え生活環境に配慮した適切な買い物の仕方	(7)(6)	
	B	金銭の有効な使い方	(7)(6)	

(3) セルフエスティームとモジュールをつなぐ

子どもの思いを大切に学習活動の流れ

セルフエスティームからスタートし、モジュールで技能を身に付け、家庭実践を行う学習の流れを図5に示した。子どもたちはモジュールを個別の学習形態で学習する。個々人がモジュールガイドブック（資料編参照）を手にしながら技能の習得を図る。これは、モジュールでの実験や実習の仕方を示したものである。

モジュール選択はこれで！

どのモジュールを選択するかは次のような自作の学習カルテとモジュール選択チャートを使う。

○学習カルテ（資料編参照）

・学習指導要領解説の(1)～(8)の8つの内容から具体的に技能を抜き出したチェックシート。

・自分の技能を見極めるため、できるかどうか自己評価させるもの。

・モジュール時の選択だけでなく、他の題材でレディネスチェックや技能の定着状況を把握できる。

・子どもには2年間の努力目標であると同時に、教師にとっては技能の評価規準になる。

○モジュール選択チャート（資料編参照）

・興味だけで仕事を選びがちな子どものために、自分の課題と実力を客観的に分析できるもの（所要時間約10分）。

・あみだくじのようにたどりながら、今までの自分を振り返るのに最適である。

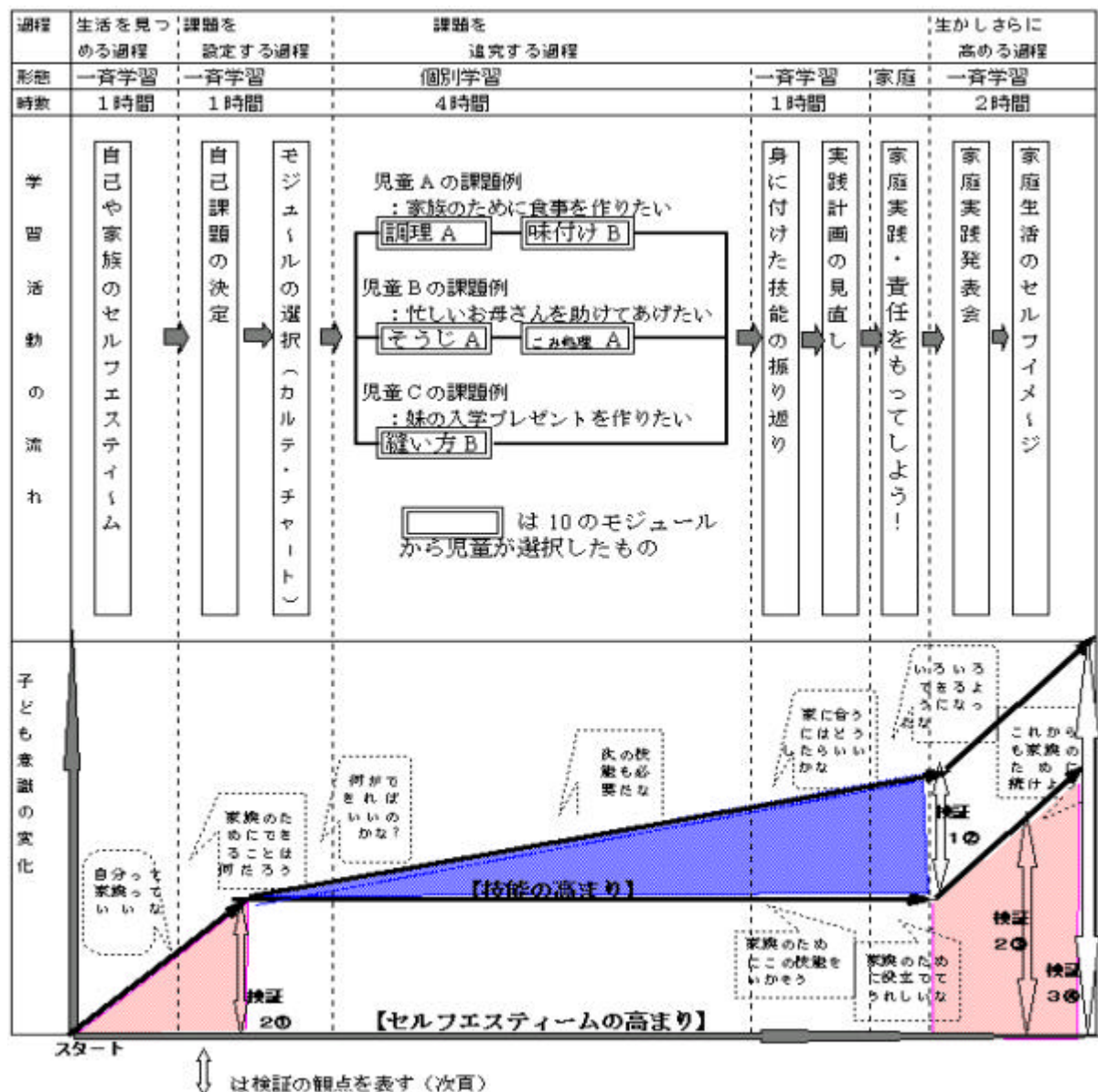


図5 学習活動の流れと子どもの意識

2 家族とのかかわりを深めようとする子どもを育てる授業実践

(1) 授業実践経過

対象	太田市立宝泉東小学校（置籍校） 6年3組（32名）
期間	平成14年10月8日～11月13日
題材	家庭科「まかせてね！家庭の仕事」

抽出児

A児	家庭科の知識はあるが、家庭での手伝いは行っていない。友達からの信頼はあるが自己肯定感は低い。
----	--

(2) 検証について

検証項目	検証の観点	検証方法
1 モジュールの有効性	関・技・知） 家族に働きかけるために適切なモジュールを選択し、モジュールの学習活動により、課題解決のための技能が身に付いたか。 （図5矢印②）	・「課題を追究する」過程での課題計画書やモジュールガイドブックの技能練習状況、学習カルテ自己評価から ・「生かし、さらに高める」過程での家庭実践の様子を伝える資料から
2 セルフエスティームの有効性	関・工・知） 家族の中の自分の存在に気づき、家族のために役立ちたいという気持ちをもてたか。 （図5矢印①③）	・「生活を見つめる」過程での自己を認識させるワークシート（いいところマップ）、「課題を設定する」過程での課題計画書から ・「生かし、さらに高める」過程での家庭実践の発表内容や家族をイメージ化した絵や文から
3 2つのアプローチの有効性	関） よりよい家庭生活を目指して、モジュール学習で習得した技能を家庭で生かそうとしているか。 （図5矢印④）	・「生かし、さらに高める」過程での家庭実践や自己、家族の振り返り（振り返りカード、いいところマップ）やモジュールの見直し、活用から

(3) 授業の展開

- ① 題材名 「まかせてね！家庭の仕事」
- ② 題材観
（省略 詳しくは資料編学習指導案参照）
- ③ 題材の目標

自分や家族のよさに気づき、今までに身に付けてきた知識や技能を自分の家庭生活に合うように工夫したり、家族を支える仕事を責任をもって実行できるようにしたりして、家族とのかかわりを深められるように工夫する。

④評価規準

家庭生活への関心・意欲・態度	・家庭生活に関心をもち、家族とのかかわり、よりよい家庭生活を目指して、家族を支える仕事をしようとしている。 ・今までの学習を生かし、自分の家庭生活に合った方法で課題を解決しようとしている。
生活を創意工夫する力	・家庭生活を見直し、自分の分担する仕事を責任をもって実行できるように考えたり、工夫したりしている。 ・家族とのかかわりをよりよくすることを考えたり、学習したことを家庭生活に合うように工夫したりしている。
生活の技能	・よりよい家庭生活を目指して、今までに身に付けてきた知識や技能を活用して、家族を支える仕事が責任をもってできる。 ・今までの学習を生かし、自分の家庭生活についての課題を解決するために技能を生かすことができる。
家庭生活についての知識・理解	・家族のよさに気づき、家族が協力して家庭生活を営んでいることや、家族を支える仕事について理解している。 ・家族を支える仕事をするための新しい知識を身に付けている。

⑤指導経過（詳しくは資料編参照。各過程での評価の観点も記載）

【過程】学習活動	研究上の手立て
【生活を見つめる】 ○自己や家族を見つめ、気が付いたことを話し合う。（1時間）	・セルフエスティームを高めるためのワークシートを取り入れる。（ワークシート①いいところマップ） ・家族の一員として家族の役割を考え、思いを表現していこうとする意欲をもたせる。
【課題を設定する】 ○家族のために何ができるか、家族の中の役割、存在を考え、課題の設定をする。（1時間）	・家族への思いを高めるため自分の役割を考えさせる。 ・学習カルテやモジュール選択チャートで身に付けなければならない技能を確認する。（学習カルテ・モジュール選択チャート） ・家族のために「責任をもって継続して」できる課題を設定する。
【課題を追究する】 ○モジュールで、知識や技能を身に付け、家庭実践の計画を立てる。（5時間） ○課題を解決する。（家庭実践）	・モジュールで個に応じた課題解決のための技能を身に付ける。 ・モジュールをどのように家庭で活用するか計画を立てる（ワークシート②課題計画書・モジュールガイドブック） ・計画に基づき、家庭実践をする。実践報告をまとめておく。
【生かし・高める】 ○家庭実践発表会をする。 ○これからの家庭生活をイメージする。	・家庭実践発表会で相互評価をし、自分の実践や家族のよさに気付かせる。（ワークシート③振り返りカード） ・実践を継続することにより家族がどうなるかセルフイメージさせ、よりよい家庭生活を目指して意欲をもたせる。（絵や文のセルフイメージ）

Ⅳ 家族とのかかわりが深められたか

1 モジュールの有効性

家族にかかわるため、適切なモジュールを選択し、課題解決のための技能を身に付けるには学習モジュールは有効であったか。

モジュール選択で実生活にあった課題解決

32 人の子どもたちの2回の選択のパターンと活動の様子は、表3の①～⑩の通りである。図6はそれを高まりと広がり視点から位置づけたイメージ図である。例えば、モジュールA→B(縦軸)と選択した場合は、同じモジュール内で、高いレベルの技能まで家庭で生かそうと考えたパターンである。これを高まり型とした。また、A→A'(横軸)を選択した場合は、同じレベルでも内容が違い、広いレベルの技能を

家庭で生かそうと考えたパターンなので、これを広がり型とした。

このような各自が選択したモジュールでの実習においては、子どもは自分の家族をしっかりと見つめられ課題を設定できたので、課題に集中して取り組み、友達の実習をうらやむことはなかった。また、この学習モジュールでは、どの子どもも必ず1つの技能が新たにできるようになったり、上達したりした。

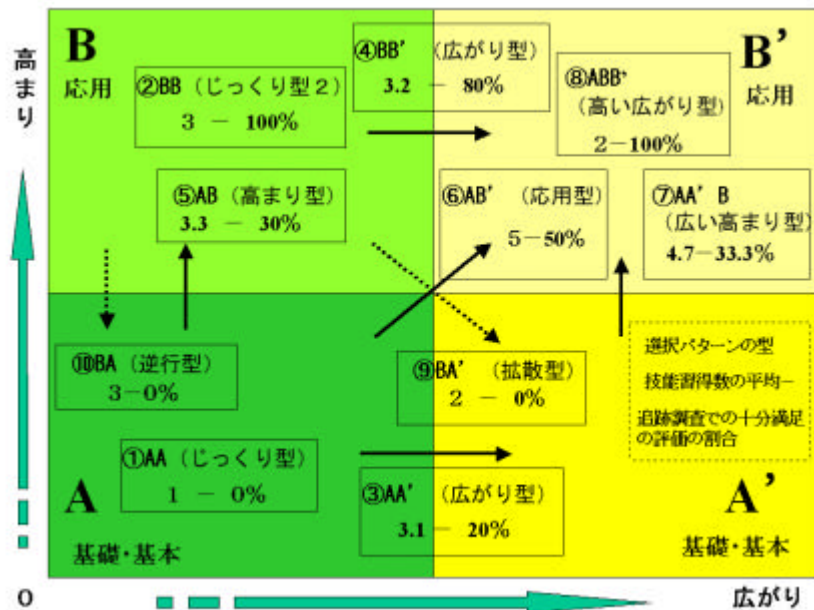


図6 モジュールの選択のパターンイメージ

表3 モジュール選択のパターンと子どもの活動

モジュール選択のパターン	選択した人数	子どもの活動	支援
① AA じっくり型	1人	縫い方モジュールを選択したため、時間がかかった。手縫いを小袋作りで繰り返し復習していた。	技能習得に意欲をもたせ、関連ある技能に気付かせる。
② BB じっくり型2	2人	2人とも縫い方モジュールで不用品を活用して袋を作る活動をしたため、時間がかかった。	もっている力が生かせるように他のモジュールに目を向けさせる。
③ AA' 広がり型	5人	課題に関連のあるモジュールが選択でき、基礎的な技能の定着は図れた。	モジュールを家庭に合うよう活用の仕方に支援が必要。
④ BB' 広がり型2	4人	もっている高い知識や技能を生かして、応用的な技能を選択し、満足度の高い活動ができた。	習得した知識や技能を実生活に生かせるよう支援。
⑤ AB 高まり型	12人	知識や技能の習得が比較的多く、おおむね順調の活動となった。	モジュールが家庭の課題に合うように、習得した知識や技能の活用の仕方についての支援が必要。
⑥ AB' 応用型	2人	基礎を身に付けた上で関連のある応用的な技能を選択したので、技能の習得数も多かった。また、各家庭での課題に必要な技能を見通して、2つ目、3つ目のモジュールが選択できたので積極的な活動ができた。	
⑦ AA'B 広高まり型	3人		
⑧ ABB' 高広がり型	1人		
⑨ BA' 拡散型	1人	それぞれのモジュールが独立した内容でつながりのない活動になってしまった。	自分の能力と課題設定やモジュールの選択が合うような支援が必要。
⑩ BA 逆行型	1人	同じ調理法モジュール内の選択であったので、包丁の使い方は上達した。	

が役に立ちたいという家族への思いが高まった。その思いを伝えるために、自分には何ができるのかと、思いを技能につなげて考えることができた。(表4)。

表4 セルフエスティームの評価

	十分に達成	おおむね達成
支えあっている家族の存在に気付く	9人	23人
家族のために自分を役立てようとする	15人	17人

家庭生活に希望をもつ子どもたち

題材の最後には、セルフイメージの作品として家庭生活の将来像を作文、紙芝居、新聞などで書き表した。その中では、モジュールを生かして家庭生活を工夫改善しようとする姿が多く見られた。子どもたちの描いたこれからの家庭生活は、近いもので1週間後、遠いもので5年後くらいのものであった。例えば、身に付けたそうじの仕方を生かして、子育てに忙しい親戚の家の掃除を手伝いたい、祖母に塩分や油分を控えた食事を作りたいなど実現性の高い作品を描いていた。学習モジュールで技能を身に付けさせ、自信をもって家族にかかわることができたことで、自分のよさや家族のよさを認めセルフエスティームも高まり、周囲にも余裕をもって優しく接することができるようになった。また、このことは家庭生活への希望をもち、家族のために役に立ちたいと意欲をもち続けているととらえることができる。

継続への意欲をもつA児

抽出児 A は紙芝居により、時間をあまりおかない近い自分をイメージした。資料3のように家庭の仕事が習慣化するとしている。また、続けることによりさらに技能が上達し、味の加減も目分量でできるようになるとしている。家庭実践では、早起きをし家族のためにみそ汁を作っていた A である。これからも続けていく決意を固め、また、自分が家族の中で役立ち、家族の喜ぶ顔を見るのが自分の喜びにつながると紙芝居を締めくくっていた。

資料3 Aのセルフイメージ



もはや日課となったみそ汁作り。とても眠そうにかみの毛もとかさずやる。半分寝ていても包丁が使える。

以上のことから、「いいところマップ」「絵や文でのセルフイメージ」を取り入れ、家族への思いを高めたことは、目的意識をもって技能を身に付け、その意欲を継続させようとするために有効であることが分かった。

3 2つのアプローチの有効性

学習モジュールとセルフエスティームを関連付けた学習は家族のかかわりを深めるために有効であったか。

モジュールの活用を工夫し意欲を継続させる

セルフエスティームで家族への思いを高め、技能を身に付けるための目的意識をもたせた。そして、学習モジュールで身に付けた技能を家族のために生かすようにさせた。この2つのアプローチが家族のかかわりに有効であったかを「生かし高める」過程での実践の振り返り、事後の「いいところマップ」、家庭の仕事の継続状況のそれぞれのアンケートから考えた。

子どもたちは、家庭実践により、家族への思いが高まり、モジュールで身に付けた技能を自分の家庭生活に合わせ、やり方を工夫しながら実践を継続していった。

学習モジュール後の評価で、技能の習得数が少なかったり、モジュールの活用が十分満足でなかったりした子どもたちも、一人を除いて、次頁の表4ようにモジュールを家庭に合わせて工夫しすることで実践を継続している。

例えば、抽出児 A も継続して家庭実践をす

るために、本来ならジャガイモは水からゆでるが、湯を沸かす間にジャガイモの皮をむくことで時間短縮ができることに気付き、時間の使い方を工夫して毎日無理なく続けられるようにしていた。

これらは、子どもたちの家族を思う気持ちが高まったからこそ、継続していると考ええる。情意面が技能を支えているのである。

表4 選択パターン別の家庭実践の継続状況

モジュール選択のパターンと人数		十分満足	おおむね満足	努力が必要
① AA	1人	→	1人	
② BB	2人	→		
③ AA'	5人	→	2人	
④ BB'	4人	→	2人	
⑤ AB	12	→	6人	5人
⑥ AB'	2人	→	1人	1人
⑦ AA'B	3人	→	2人	1人
⑧ ABB'	1人	→	1人	
⑨ BA'	1人	→		
⑩ BA	1人	→	1人	
計		17人	14人	1人

自己や家族の肯定感が増した子どもたち

家庭実践を継続できず、努力が必要と判断した子どもは、事後アンケートの「いいところマップ」では、自己肯定感の気づきの数は残念ながら増えていなかった。また、家族の肯定感も同様で外見のよさだけに触れていた。

それ以外の子どもたちの「生活を見つめる」過程と「生かし高める」過程での自己の肯定感の高まりの変化は図7の通りである。家庭で実践してからは、どの子どもも肯定的にとらえる言葉が多くなった。外見でとらえるのではなく、内面にまで触れた言葉も多く見られるようになってきた。このことは家族の肯定感や家族の見方でも同様な結果が得られた。

事後における肯定的な見方や内面への気づきの内容を分析すると図8のように技能の向上、家族のかかわりに関する言葉や地域にまで目を向けた言葉が増えた。例えば、「父親は休日には母と一緒に家事をしている」、「家庭での仕事では、私を頼りにしてくれるようになりうれしい」といったような肯定的に家族とかかわる言葉である。また、「風呂掃除の汚れの落とし方を廊下掃除でも生かし、さらに家族の役に立ちたい」と言ったように他の仕事への興味や意

欲をもった言葉も見られた。そして、「いいところマップ」の単語をつなぐ線も中央の名前から気付いた事実の線がのびるだけではなく、それらの気づきが他の家族につながったり、家族がそれぞれ家庭の仕事にかかわったりしていると線が複雑にのびてきた。そして、家族が支え、育ててくれることに対する感謝の言葉もマップに見られるようになった。

これらは、子どもたちがモジュールでの技能を生かし、課題を解決するために家庭実践に励んだ際、家族に進んで働きかけたからと考える。技能が情意面に作用したことの結果である。

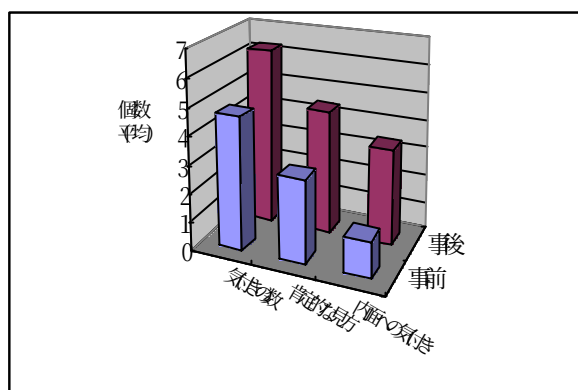


図7 自己肯定感の高まりの変化

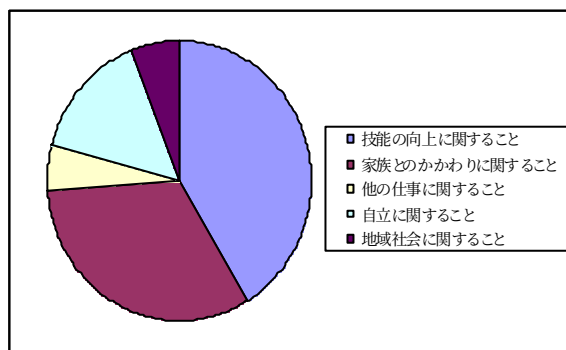


図8 自己の見方の分析

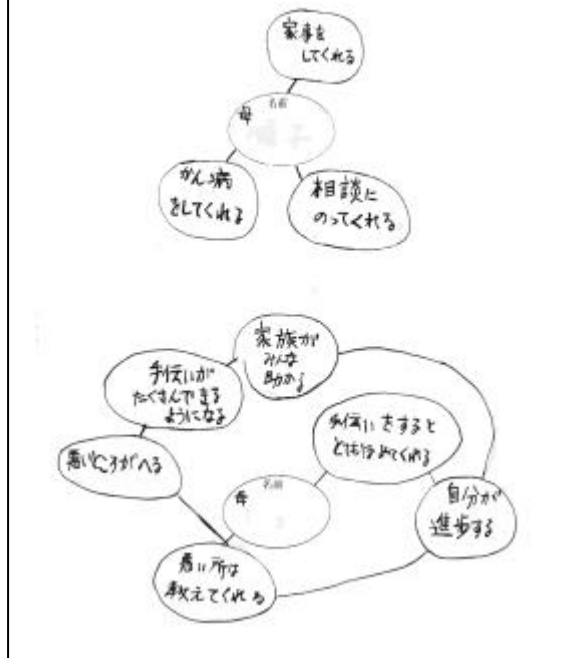
内面のよさに気付くA児

抽出児Aの「いいところマップ」(次頁資料4)を見ると、導入時、母親を外見的なことではしかとらえていなかったものが、実践後は内面にまで触れた言葉が出てきた。また、「悪いところを教えてくれる」の言葉からも母親からの忠告も素直に聞き入ることができてきたようだ。そして、それが手伝いにつながり、進歩という言葉につながることもわかるように、家族とかかわりにより技能が向上し、よりよい

家庭生活になることに気が付いたマップになっている。

資料4 Aのいいところマップ

(上段：導入時、下段：実践後)



以上のことから、よりよい家庭生活を目指して、技能面と情意面の双方からのアプローチは子どもたちの思いや願いを大切にしながら、自己実現をする上で有効であった。

V まとめ

問題解決的な学習を取り入れ、技能と家族とのかかわりを関連付けたこの学習活動は、子どもたちの家族における存在感を高め、基礎・基本を身に付けた上で技能により、家族に思いを表現できるという点で有効であった。

モジュールを家庭生活の工夫の内容に取り入れたことで、全技能の学習内容の関連が見えてきた。子どもたちは衣食住の技能を総合的にとらえ、実生活に沿って課題が解決できた。小学生の段階で、子どもたちの少ない生活経験では、すぐに技能の習熟まで求めることは難しい。しかし、この研究により家庭生活に関心をもたせ、繰り返し個に応じた課題を解決させることが技能の習熟につながるということが分かった。今後は指導者がこのモジュールを教室へもっていき、子

どもたちに活用させることで、技能を家庭生活に生かし、家族とのかかわりが深められるように教材の内容をさらに創意工夫していきたい。

そして、このモジュールの考え方を他の実技教科でも取り入れることができないか探していきたい。

VI 参考文献

- ・『小学校新しい教育課程の展開 家庭科 基礎・基本と学習指導の実際』
水野香代子・橋本都編著
2002 東洋館出版
- ・『ティーン・ガイド
人間と家族について学ぶアメリカの家庭科教科書』
ヴァレリーチェンバレ著
1992 家政教育社
- ・『個別化個性化教育の理論』
加藤幸次・安藤慧著
1985 黎明書房
- ・『わたし、あなた、みんな』
エリザベス・キャリスター、ノエル・デヴィス、バーバラ・ホープ共著
1994 ERIC

